



## 感染症

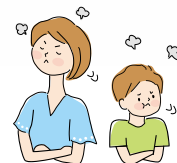
公立久米島病院 内科医  
會澤 佳昭 (あいざわ よしあき)

現在、新型コロナウイルスによる感染症が世界に拡大し、まだしばらく感染者数、死亡数が増加していくものと予想され、日本でも第2、第3波が予想され、皆さん不安を抱えながら生活しているのが現状と思われる。今回感染症について整理したいと思います。感染症とは、環境中に存在する病原性の微生物(ウイルス、細菌、真菌(カビ)など)が、人の体内に侵入することで引き起こされる疾患です。感染症を引き起こす微生物を病原体と言います。感染は、病原体が体内に侵入し、定着し、増殖することで成立します。感染しても、症状が現れる場合と、はっきり症状が現れない場合(不顕性感染)があります。今回の新型コロナウイルス感染でも問題となっていますが、不顕性感染者や、感染初期は、自覚がなくても、ウイルスを人に移す可能性があります。この事が全ての人に対してマスク着用、手指消毒の徹底を呼び掛けている理由です。自覚がないために感染源となって感染を拡げる可能性が高く、感染の次にウイルス、細菌、真菌の違いについて述べ

ます。細菌と真菌の大きさは人の細胞の1/10位で、ともに光学顕微鏡で何とか見ることができます。ウイルスとても小さく、電子顕微鏡でないと確認できません。細菌と真菌は自己増殖し、真菌は菌糸を成長発育させ病巣を拡大させます。しかしウイルスは単独で増殖できず、他生物の細胞に寄生し、材料を利用して自己複製させる構造体で、生体膜などの細胞構造を有しません。細菌、真菌の治療には、それぞれ直接菌を破壊する抗生物質、抗真菌剤を使用します。ウイルスは体内で人の細胞内に入り込み、自身は細胞構造を持たないことから、直接破壊できる薬剤が無く、細胞内での増殖過程を抑制する薬剤や人の免疫機構を増強させて治療します。またウイルスは多様で万能薬も無く、それぞれのウイルスを標的に薬剤が作られています。咽頭炎でも、細菌が原因の溶連菌感染には抗生物質で治療するが、ウイルスが原因のかぜ症候群には抗生物質が効かないのは、細菌とウイルスは全く異なる微生物だからです。

## 「欲求の対立への対処法は『勝負なし法』

～親子の対立を減らす親子関係の作り方：「親業」から学ぶ②～



公立久米島病院 小児科 渡邊 幸

### 1) 誰の問題かわからないとき

前回問題の所有者について記しましたが、「誰の問題なのか線引きできないときは？」との質問が多くありました。例えば「親が何度声かけしても、外出の支度をしない」「注意しても雨の中傘をささずに出かける」などは、親と子の意見が対立し、互いに問題を所有しています。大小を問わず、家庭内でこのような対立はよくあると思います。

### 2) 対立の対処を通して親も子どもも成長する

「親業」の著者ゴードン博士は親子間で欲求が対立することはごく自然な現象で、対立がない関係(親が極度に支配的、親が極度に子供に迎合)の方がむしろ不健全であると言います。対立が「何度起こるか」より「どうやって解決されたか」が関係づくりには大切であり、対立を避けるのではなく、それに対処する方法を身につけていくことがその先の人生に有益な経験となるといいます。

### 3) これまでの対立解決法：「勝負あり法」

対立が起こると「親が解決法を考え、子を従わせる(第1法)か、「子が解決策を主張し、最終的に親が譲る」(第2法)で解決することがほとんどです。どちらも片方

が相手を説得して意見を押し通そうとするため、「相手を尊重」することが学ばれません。第1法が多い場合、権威(厳しさ)の下では規律は守れるが、それがないと自主的に規律を守れないなど、「自分に対する責任感」を発達させる機会を損ないます。第2法が多い家庭では、子供は自己中心的になりやすく社会で困りやすいと言われます。

### 4) 新しい対立解決法の提案：「勝負なし第3法」

ゴードン博士が勧める第3法はビジネスや国交ではよく使われている方法で、「交渉」により互いが納得する方法(和解の道)を考えるというものです。具体的には、親子で対立が生じた際に、思いつく限りの解決策を一緒に考え、出てきた案を評価しながら親子が受け入れられる解決策を選んで決める、というものです。第3法の特徴は互いに納得してその解決策を受け入れるので、誰も「負けないこと」です。また自分で決めた解決策は守ろうとするので、その後につながる方法と言えます。

まずは家庭で対立にどのように対処しているかを振り返り、ぜひ一度第3法を試して見てください!

具体的な方法は次号以降で。

参考図書：トマス・ゴードン「親業」(大和書房)